

## [ガウニロの反論]

これらのことに対し、愚か者になりかわってどのように答えればよいのか。

### 第一章

それ以上に大きなものが何も考えられえないようなものが存在しているか疑い、あるいは存在していることを否定している者に対し、そのようなものが存在していることは、そのようなものについて否定しあるいは疑っている者もすでにそれを知解においてもっているということから証明されるとまず最初に言われ、次には、彼が知解していることは知解においてだけでなく事物においてもあることが必然であると言われるとき、——このことは次のように証明される。知解においてのみあるより事物においてもある方がより大きい。したがってそのものが知解においてのみあるなら、事物においてもあるものの方がそのものより大きいことになる。ところがそうだとすると、すべてより大きいものが、何かより小さいことになり、これはもちろん矛盾である。それゆえ、すでに知解においてあることが証明されている、すべてより大きいものは、知解においてあるだけでなく、事物においてもあることが必然である。それ以外の仕方ではすべてより大きいことはありえないからである、——この論に対して次のように答えられるであろう。

### 第二章

このものがすでにわたしの知解においてあると言われるのは、他でもない、言われていることをわたしが知解しているからである。しかし、偽なることやそれ自身ではけっして存在しないことでも、誰かがそれを語り、彼の語ったことをわたしが知解するなら、同じように、わたしはそれを知解においてもっていると言われうるのではないか。それとも、[それ以上に大きなものが考えられえないものは、] 偽なるものや疑わしいものと同じような仕方で、思考 *cogitatio* においてもたれることができないのは明らかで、したがって、聞かれたそのものを考えているとか、思考においてもっているとわたしが言われることはなく、ただ知解しているとか知解においてもっているとされるだけなのだろうか。すなわち、わたしは、そのものを知解することによって、すなわち事物として存在していることを知識によって捉えることによってしか、考えることができないということなのか。しかしもしそうであるとすれば、第一に、同じものが時間的に先行する段階で事物を知解においてもっていることと、そのものが時間的に後続する段階で事物が存在すると知解していることとは別ではないことになる。これは絵の場合に起こることで、絵はまず画家の精神において存在し、次いで作品として存在する。第二に、それ [それ以上に大きなものが考えられえないもの] が語られ聞かれたとき、神が存在しない [と考えられうる] のと同じような仕方で、存在しないと考えられうるのではないというのは、信じがたい。というのも、それが [存在しないと] 考えられえないとしてみよう。それならなぜ、そのようなものが

存在することを疑い、あるいは否定しているひとを反駁して、このような議論の全体が必要だったのか。最後に、それが、考えられるや否やその存在が疑いえないほど確実に知解によって捉えられるようなものなのであれば、何か疑いえない論証によってわたしに証明されるべきであり、いまの論証のような仕方、聞いて知解するときわたしの知解の内に存在しているという仕方、論証されるべきではない。他の不確実なあるいは偽であるものも、それが、そのことばをわたしが知解できる誰かによって語られたとき、同じような仕方、知解において存在しているとわたしはいまでも考えている。しかも、しばしば起こることであるが、いまのこのものをまだ信じていないわたしが、だまされてそれら「不確実なもの、偽であるもの」を信ずることがあるとすればなおさらである。

### 第三章

だから、描こうとしている絵をすでに知解においてもっている画家の例も、いまの論に十分には適していない。というのは、その絵は、できあがる前は画家の技術知においてもたれていたものであり、このようなものはいずれかの技術者の知においてあり、彼の知性認識 *intelligentia* の一部に他ならないからである。なぜなら、聖アウグスティヌスが言うように、「箱を作品として作ろうとしている職人は、それをまず技術知においてもっている。作品として作られた箱は生命ではないが、技術知においてある箱は生命である。なぜなら技術者の魂は生きており、これらのものはすべて、作り出される以前にはこの魂においてあるからである。」どうしてこれらのものは、技術者の生きている魂において生命であるのか。それは彼の魂における知識ないし知性認識であるからに他ならない。ところが、精神そのものの本性に含まれていると知られるもの以外で、聞かれあるいは考え出されて、真であると知性により捉えられるものはすべて、当然であるが、その真なるものと、真なるものがそれによって捉えられる知解とが別である。だから、それ以上に大きなものは考えられえない何かが存在していることが真であるとしても、聞かれ知解されたものとしては、まだ描かれていないで画家の知解においてある絵と同じようなものではない。

### 第四章

すでに触れたことだが、次のこともここに加わる。考えられうるすべてより大きいものは、神に他ならないと言われるのであるが、それを聞いたとき、わたしは、種や類を手懸かりに知られた事物として考えることも、知性においてもつこともできないし、それは神そのものについてできないのと同じことであり、だから神は存在しないと考えることもできるのである。というのも、わたしは事物そのものを知らないし、それに似た他の事物から推測することもできない。じっさい、あなたもそれが、何か似たものは他にありえないような事物であると主張しているのである。というのも、わたしのまったく知らないひとについて、存在しているかさえ知らないひとについて、何か語られるのをわたしが

聞くとしよう。そのとき、ひととは何か、ひとびとは何かを知っている種的なあるいは類的な知によって、ひとであるところの事物そのものについて考えることができたであろう。しかし、話したひとが嘘をついている場合、わたしが考えているそのひとは存在しないということもありうる。しかしそれでも、そのひとについて、真なる事物として、ただし、そのひとがそれであるところの事物ではなく、任意のひとだれでもがそれであるところの事物として、考えることができる。しかし、この偽なるものを思考においてあるいは知解においてもつことができるのと同じような仕方、わたしが神と聞くと、あるいは「すべてより大きい何か」と聞くと、そのものをもつことができるのではない。かのものは真なる、またわたしに知られている事物として考えることができるのであるが、このものはただ音声としてしか、それだけではどのような真なるものも考えられることがほとんどあるいはまったくできないところの音声としてしか考えられないからである。そのようにして考えられるとき、それ自体は真なる事物である音声そのもの、すなわち字母や音節の響きは、聞かれた音声の表示と同じようには考えられないからである。その音声によって通常何が表示されるかを知っているひとによって、すなわち、思考においてだけでも真なる事物として考えているひとによって考えられているような仕方、考えているのではなく、そのものを知らず、その音声を聞くことによって生じ、受けとられた音声の効果と表示とを自分のために作りあげようとしている魂の動きとしてだけ考えているひとのような仕方、考えているだけである。このひとが、もし事物の真理において考えることができたとすれば、驚くよりほかない。考えられうるすべてのものより大きい何かが存在すると言われるのをわたしが聞き知解するとき、それがわたしの知解にもたれている仕方も、これと異なることは明らかである。最高の存在者がわたしの知解においてあると言われている点については、以上としよう。

## 第五章

それが事物においても必然的に存在することは、次のことからわたしに証明される。すなわち、もしそうでない〔事物において存在しない〕とすれば、事物においても存在するものであれば何でもそのものより大きいことになり、したがって、すでに知解においてあることが証明されているそのものは、すべてより大きいのではないことになる。これに対して、わたしは次のように答える。真実の事物としては考えられえないものも、知解において存在すると言ふべきであるとするれば、このものがそのような仕方、わたしの知解において存在していることをわたしも否定しない。しかし、このことから、事物においても存在しているということにはけっして到達できないのだから、疑いえない論によってわたしに証明されるまでは、そのような存在をそのものにわたしはけっして認めない。そうでなければ、すべてより大きいものがすべてより大きいものではないことになるから、そのようなものは存在するのだと言うひとは、自分が誰を相手に話しているのかよくわかっていない。というのも、かのものが何らかの真なる事物より大きいということ、わたしはま

だ認めていない。というよりむしろ、否定しあるいは疑っているからである。わたしがそのものに認めている存在は、音声としてだけ聞かれ、まったく知られていない事物を、精神が自分のために作りあげようとするとき、それを存在であると言うべきであるとして、そのような存在である。だから、このことを根拠にどのようにして、かの「より大きなもの」は、それがすべてより大きなものであることは明らかだから、事物の真理において実在していると、わたしに証明してくれるのであろうか。わたしの知解あるいは思考においてだけであっても、多くの疑わしいもの不確実なものと同じような仕方さえ、「より大きいもの」が存在するというのを、わたしは否定しあるいは疑っているのである。まず、その、より大きいものが真実の事物としてどこかに存在することが、わたしにとって確実とならなければならない。そのときはじめて、すべてより大きいことから、それ自身として実在することが疑いえないこととなるであろう。

## 第六章

たとえば次のように考えてみよう。あるひとが、大海のどこかに島があるが、それが無いということを見出すことが困難というより不可能であるために、失われた島と名づけるひといて、幸せな島について伝えられるよりはるかに、財と美味の測りしれない多さでまさっており、所有者も住民もいないため、人間が住んでいる他の土地の全体より、所有されるものの豊かさではるかにまさっていると語り伝えられている。このように誰かがわたしに話すとき、何の困難も含まないこの話をわたしは容易に知解する。そのとき彼が、いわば帰結のように付け加えてこう言うとしよう。きみはきみの知解において存在することを疑っていないその島、他の地の全体をあわせたよりまさっているその島が、どこかに真に存在していることを疑うことはもはやできない。それはよりまさっているのだから、知解においてのみではなく、事物においても存在する。だから、その島が存在することは必然である。もしそうでなければ、事物においてある他の土地はどのようなものでも、その島よりまさっていることになり、かくして、きみがよりまさっていると知解したその島がよりまさってはいないことになるであろうから。もし彼がこのような論によってわたしにかの島について、それが真に存在していることはもはや疑うべきではないと説得しようとするなら、わたしは彼が冗談を言っているかと確信することになるか、あるいはもしわたしが彼に同意したとしてそのわたしか、あるいは彼が何か確かさをもってその島の存在を説得したと彼が思うならその彼か、いずれかをより愚かであると思なすことになるか、どちらかであろう。もし彼が、その島のまさっていることは、事物として真に疑いえない仕方で存在しているのであって、偽りのあるいは不確実なこととしてわたしの知解においてのみあるのではないということ、まずわたしに教えていなかったとすれば。

## 第七章

このようなことを、愚かなものはさしあたり異論に対して答えるであろう。彼に対して、

次に、かのより大きなものは思考において存在しないことができないだけではないと主張され、それがやはり、そうでなければすべてより大きいのではないことになるからということが証拠とされるなら、同じことを述べて答えることができるだろう。「いつわたしは、そのような何か、すなわちすべてより大きいものが事物の真理において存在している」と言っただろうか。そして、そのことからこのものは事物においても存在しており、存在しないと考えられえないほどであるとわたしに証明されるべきであることになるのだろうか。だからまず最初に、もっとも確実な論拠によって、何らかのより上位のもの、存在するすべてのなかでより大きくより善いものが存在することが証明されなければならず、そのことから、かのすべてのものより大きくより善いものが欠いていないことが必然である他のことも一緒に証明されるようにしなければならない。この最高の事物は存在しないと考えられえないと言われているが、存在しない、あるいは存在しないことがありうると知解されえないと言う方がよかったであろう。このことばそのもののあり方によって、偽なるものは知解されえないが、その偽なるものも神は存在しないと愚かな者が考えたのと同じ仕方では考えられうるからである。そしてわたしは、わたしが存在していることを確実に知っているが、存在しないこともありうることもそれに劣らず知っている。しかしかの存在する最高のもの、すなわち神は存在し、存在しないことはありえないと疑うことなくわたしは知解する。しかしわたしが存在しないと考えることは、わたしが確実に知っているかぎり、できるかどうかを知らない。しかし、できたとしても。それなら他のこともなぜ同じような確実さをもって知らないのか。しかしもしできないのであれば、これは神に固有のことではないことになる。

## 第八章

この書の他の部分は、きわめて真実で美しく堂々と論じられており、有益で敬虔で聖なる愛が内なるとでもいうべき香りを漂わせ、最初の部分の正しい考えではあるがいまひとつ確かでない議論のために、軽んじられてはならない。むしろ最初の部分をもう少し強力な議論にして全体が大いなる尊敬と賞賛を受けるようにすべきである。

© Sumio Nakagawa